読売新聞
2016年12月24日　掲載

ネパール 校舎1棟再建

全半壊 日本人ら支援

あと10教室 協力を

東京都市大
准教授

2015年4月のネパール大地震で全半壊した現地の学校を再建するため、ネパール出身で東京都市大環境学部（横浜市都筑区）准教授のリジャル・ホム・バハドゥルさん(47)らが呼びかけていた支援運動が実を結び、耐震補強された校舎が1棟建設された。リジャルさんは日本人らの善意に感謝しつつ、「震災前の状態にするにはあと約750万円が必要。引き続き協力してほしい」と訴えている。（加藤千城）

日本からの資金で再建された校舎で学ぶ生徒ら（リジャルさん提供）

リジャルさん

リジャルさんはネパールの首都・カトマンズの北西約50キロに位置し、標高1500メートルの山中にあるサッレ村の出身。母国の教育向上のため、2003年にNPO法人「バル・ピパル奨学基金」を設立し、日本で資金を集めて同村で学校を建設・運営している。

大地震では、サッレ村にある約60軒の民家の大半が被災し、村民はトタン屋根やブルーシートを張った仮設小屋で暮らす。日本からの支援で建設された村の学校も被害を受け、7棟計17室のうち15室が全半壊。このうち4室は政府支援による再建が見込まれるが、残る11室は独自に修復・再建が必要となった。小中高校生約250人は今も、廃材を利用した簡易な仮設教室などで勉強している。

リジャルさんの支援活動を知って共感し、協力を申し出たのが環境ジャーナリストで同大教授の枝広淳子さん(54)。2月にフルマラソンでのチャリティーランを実施し、インターネットを通じて資金を募る「クラウドファンディング」を行うと、新聞報道で知った人の寄付も合わせ約140万円が集まった。

校舎の設計には、リジャルさんの母校・国立トリブバン大の卒業生や学生が参加。基礎からしっかり造り直し、はりが鉄筋でコンクリート造りの校舎が今年秋に1棟（1室）完成した。校舎では現在、パソコンの授業や理科の実験が行われているという。

枝広さんは「これはゴールではなくスタート。大地震の前に戻すには、あと10教室を再建しなければいけない。日本からのクリスマスプレゼント・お年玉として、支援金を送ってくれる方がいっぱいいたらうれしい」と話している。支援活動の詳細は同NPOのホームページ（http://barpeepal.com/）で。支援の連絡はリジャルさん

生徒らからコメント

「たくさん勉強したい」……

リジャルさんの元にはこれまでに、校舎の建設報告や再建後の写真とともに、教師や生徒ら44人分のアンケートが届いている。中学3年女子のサンティ・グルングさんは「地震に強い建物が完成し、とても喜んでいる。ただ、今も仮設校舎を使って勉強するため雨期には雨が入ってくる。ほかの校舎も同じ方法で建ててほしい」とし、高校1年男子のスザン・タパ・マガルさんは「この建物でたくさん勉強したい。被災者にも耐震補強された家の造り方を教えてほしい」とコメントしている。

●この記事・写真等は読売新聞社の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。